

社団法人 全日本病院協会

5  年史



序

東日本大震災で亡くなられた多くの方々のご冥福を祈り、被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

全日本病院協会50年史の序を、お見舞いの言葉で始めなければならないことに深い悲しみを感じつつも、今、強い決意に燃えております。

全日本病院協会は、昭和36年に導入された国民皆保険制度とほぼ時を同じくして誕生し、ともに50年の道のりを歩んできました。日本の国民皆保険制度は世界に評価される制度となりましたが、その中で、全日本病院協会会員の果たす役割は決して小さくなかったと自負しています。全日本病院協会の50年の歴史は、日本の民間病院の歩みであったといっても、過言ではないと思います。

本50年史からもご理解いただけるように、50年は苦労の連続でありました。診療報酬が不十分な中、医療従事者が足りない中で、努力しながら、地域医療を支えてきました。さらに、公私間格差の中で、民間病院の担っている役割を正當に評価してほしいと闘い続けてきました。

私が全日本病院協会の役員になったのは平成5年、秀嶋会長の時代でした。当時、日本の医療は量から質への転換期を迎えており、全日本病院協会もちょうど基盤が出来上がり、世代交代の時を迎えていたといえましょう。そのような時期、秀嶋会長をはじめ多くの諸先輩のご指導の下、我々が医療の質を高めるための活動に取り組めたことは、大変幸せであったと思いますし、そうした医療の質の向上への取り組みが今日の全日本病院協会の礎になったと考えます。

改革の流れは、佐々会長に引き継がれ、医療の質の向上への取り組みがさらに明確に打ち出されました。その顕著な現れの一つは、それまで個別に進めていた各委員会の議論や活動を連動して、一元的に進めるようにしたことです。その中心となったのが平成10年の中小病院あり方委員会の設置でした。中小病院あり方委員会はやがて、病院のあり方委員会に発展し、若手が集まって、「病院のあり方に関する報告書」を作成することができました。報告書は版を重ね、現在、第6版の発行を目前としています。

「病院のあり方に関する報告書」の存在は、全日本病院協会にとって実に大きなものとなりました。報告書を作成するために、私たちはいろいろな勉強をしましたし、10年、20年後を見据えた提言をしようと議論を重ねる中から、全日本病院協会の活動の柱とも言うべきものができ、さらには全日病総研が誕生しました。

おそらく、そうした取り組みによって、それまでの先輩役員や会員のみな様のご努力によって少しずつ積み重ねられた全日病の評価が高まっていったと考えます。また、そうした活動への共感が近年のあまりにも行き過ぎた財政抑制の考えに基づく医療制度改革

革への危機感とあいまって、現在2,300を超える会員増の基調につながっているものと思います。

今、来し方を振り返り、全日本病院協会は本当に国民の求めるところに十分応えてきたのかを、自からに問いかけてみました。

全日本病院協会は、誰よりも真摯に国民の声に耳を傾け、説明と同意に力を注ぎ、医療安全にも注力してきたと自負しています。しかし、時代の急速な変化の中で真に国民が望む水準にまで高められていたかといえば、100%応える体制になっていなかったという反省が残ります。それは我々病院の努力だけで成し遂げられるのではなく、今後は、現場で医療を担う医療機関と国がそれぞれの役割の下、情報を共有して、共同作業をしていくことが必要です。また、時には病院団体の枠組みを超えて、国民に満足いただける医療提供に向けて、大きなうねりを創り出していくことも必要と考えます。

現在、全日本病院協会が直面する喫緊の課題は、東日本大震災の被災病院を支援し、被災地の地域医療を復興することです。そして、それと同時に、従来から取り組んできた全日本病院協会の日々の活動を積み重ね、継続し、医療現場から医療のあるべき姿を提起していくことです。両者は互いに関連しています。復興支援で我々に求められることは我々が取り組んできた地域医療の実践に他なりません。

全日本病院協会の役割は、平時にあってもいかなる非常時にあっても、国民の求めに応える医療の提供体制の構築に力を注ぐことです。全日病総研のさらなる充実を図り、常に10年先、20年先を考えながら、日本の国民が望むあるいは私たちが望ましいと思う日本の医療のあるべき姿を「病院のあり方に関する報告書」で提起し、常に更新していかなければならないと、決意しています。

全日本病院協会は、国民のすべての方々が求める医療の実践に向けて、さらに進化を続け、その理念を新たな50年の担い手にしっかりと引き継いでいくことを誓って、50年史の序とさせていただきます。

平成23年3月31日

社団法人全日本病院協会 会長 西澤寛俊

目 次

序	2
社団法人 全日本病院協会 創立50周年記念式典	9
歴代会長	12
序 章 昭和35年、36年当時の医療事情	13
第1章 私的病院大同団結を目指し出発	17
扉 裏 小澤会長時代—その1—	18
第1節 (昭和37年度) 全日本病院協会、大阪で発足	19
第2節 (昭和38年度) 会員増へ小澤会長全国を回る	21
第3節 (昭和39年度) 関東進出へ前田副会長選出	23
第4節 (昭和40年度) 看護婦不足いよいよ表面化	25
第5節 (昭和41年度) 全日病の活動、全国に広がる	28
第6節 (昭和42年度) 常任理事制導入で機能強化	30
第7節 (昭和43年度) 「全日病ニュース」創刊	33
第2章 他団体と調整を図り全日病強く結束	35
扉 裏 小澤会長時代—その2—	36
第1節 (昭和44年度) 全日病独自の旗色明確化を目指す	37
第2節 (昭和45年度) 「全日本病院協会綱領」採択	42
第3節 (昭和46年度) 保険医総辞退を試みた医療界	47

第4節	(昭和47年度)	全日病・日病合同へ協議続く	52
第5節	(昭和48年度)	「合同」で定款の改正の合意を急ぐ	57
第6節	(昭和49年度)	日病との合同と全日病解散を協議	61
第7節	(昭和50年度)	新たなる出発を迎える	64
第3章 戦国時代から協調の時代へ			69
扉裏 菊地会長時代			70
第1節	(昭和51年度)	菊地眞一郎会長体制発足	71
第2節	(昭和52年度)	私的病院への課税減免目指す	74
第3節	(昭和53年度)	小澤名誉会長逝く	77
第4節	(昭和54年度)	菊地会長再選	80
第5節	(昭和55年度)	創立20周年を祝う	82
第6節	(昭和56年度)	診療報酬、技術料重視へ転換	85
第7節	(昭和57年度)	老人保健法の成立	87
第4章 医療費抑制策の中での苦闘			91
扉裏 木下会長時代			92
第1節	(昭和58年度)	木下二亮新会長体制発足	93
第2節	(昭和59年度)	患者1割負担の導入	97
第3節	(昭和60年度)	忍び寄る医療費抑制策	100
第4節	(昭和61年度)	相次ぐ支部結成で団結深まる	104
第5章 私的病院の牽引車へと組織強化			107
扉裏 田蒔会長時代			108
第1節	(昭和62年度)	初の会長選挙で田蒔新会長に	109
第2節	(昭和63年度)	ブロック別研修会始まる	113

第3節	(平成元年度)	情報化対応の組織編制	118
第4節	(平成2年度)	看護婦不足へのさまざまな取り組み	123
第5節	(平成3年度)	田蒔会長任期半ばで急逝	127
第6章 激動期に立ち向かう全日病			133
扉裏 秀嶋会長時代			134
第1節	(平成4年度)	看護職確保問題の顕在化	135
第2節	(平成5年度)	病院経営調査始める	140
第3節	(平成6年度)	中小病院の安定化に取り組む	145
第4節	(平成7年度)	創立35周年を迎えて	151
第5節	(平成8年度)	高まる介護保険導入の議論	159
第6節	(平成9年度)	DRGへの取り組み進む	166
第7節	(平成10年度)	中小病院あり方プロジェクト委始動	174
第7章 科学的根拠に基づいた病院経営への挑戦			181
扉裏 佐々会長時代			182
第1節	(平成11年度)	介護保険制度導入前夜	183
第2節	(平成12年度)	全日病の理念と行動基準を採択	189
第3節	(平成13年度)	活発な委員会活動で四病協を牽引	197
第4節	(平成14年度)	佐々会長が中医協委員に	203
第5節	(平成15年度)	形を見せた“地域一般病棟”	211
第6節	(平成16年度)	各種調査が活力を高める	222
第7節	(平成17年度)	“介護療養型廃止”に「否」	233
第8節	(平成18年度)	新たな“医療経営人材育成”へ	243
第8章 積み重ねた独自の情報で医療崩壊に挑む			255
扉裏 西澤会長時代			256

第1節	(平成19年度)	終末期医療の指針を策定	257
第2節	(平成20年度)	シンクタンク創設へ動く	270
第3節	(平成21年度)	広範な活動で病院団体をリード	284
第4節	(平成22年度)	半世紀の証明、50周年記念式典を挙	300
資料編			313
全日本病院協会定款／314、補助金事業／324、全日病の出版物／326、事務局関係／326、会員数の推移／327、委員会の変遷／328、全日病学会開催地一覧／336、叙勲および褒章受章者／339、歴代役員一覧／340、支部長一覧／346、全日本病院協会の50年の歩み——年表／350			

社団法人 全日本病院協会 創立50周年記念式典

平成23年1月13日(木) ホテルオークラ東京(東京)



50周年記念式典で挨拶をする西澤会長。



来賓は左から厚労省大谷泰夫医政局長、日本医師会原中勝征会長、四病院団体協議会代表・日本病院会塚常雄会長。



左から神野、猪口、安藤、西澤の正副会長。



式典は猪口正孝常任理事の司会で始まった。挨拶に立った西澤会長は、全日病の歩みは民間病院の50年の歩みそのもの、と述べた。



受賞者を代表して謝辞を述べる濱砂重仁常任理事。



50周年記念式典の閉会の辞を述べる猪口雄二副会長。



厚生労働大臣表彰、全日本病院協会会長表彰受賞者に、濱砂常任理事のユーモアあふれる謝辞に思わず笑顔が見えた一瞬。



特別講演の司会で講演の田原総一郎氏の紹介をする神野副会長。



特別講演で田原総一郎氏は日本の病院への注文を妻をがんで看取った体験を踏まえて語った。



スライドショーは、会場に思い出話の輪をつくった。



写真パネル展で歴史の重みを実感する。



全日本病院協会代議員会木村佑介議長による乾杯。



次の50年につなぐ安藤副会長の祝賀会閉会の挨拶。

歴代会長



初代会長 小澤凱夫



2代会長 菊地眞一郎



3代会長 木下二亮



4代会長 田蒔孝正



5代会長 秀嶋宏



6代会長 佐々英達



7代会長 西澤寛俊